令和二年度県立高等学校入学者選抜学力検査

国　語

注　意

1 **問題の1は放送による検査です。**問題用紙は放送による指示があるまで開いてはいけません。
2 問題用紙は表紙を入れて八ページあり、これとは別に解答用紙が一枚あります。
3 受検番号は、検査開始後、解答用紙の決められた欄に記入しなさい。
4 机の上に置けるものは、受検票・鉛筆（シャープペンシルも可）・消しゴム・鉛筆削りです。
5 筆記用具の貸し借りはいけません。
6 問題を読むとき、声を出してはいけません。
7 印刷がはっきりしなくて読めないときや、筆記用具を落としたときなどは、だまって手をあげなさい。
8 「やめなさい」という合図ですぐに書くのをやめ、筆記用具を置きなさい。

答えの書き方

1 答えは、問題の指示に従って、すべて解答用紙に記入しなさい。
2 答えはていねいに書きなさい。答えを書き直すときは、きれいに消してから書きなさい。
3 答えを漢字で書く場合は、楷書（かいしょ）で書きなさい。

(4) すぐには気持ちを切り換えられないだろう（え）とありますが、ある生徒が、「父」の気持ちについて次のようにまとめました。［　　］に入る具体的な内容を**三十五字以内**で書きなさい。

「父」は棋士を目ざしている「祐也」に対して、［　　］と願っている。

(5) 祐也（お）は顔がほころんだ とありますが、このときの「祐也」の気持ちとして最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 母の言葉でやる気が湧きあがり、今度こそはと闘志を燃やしている。
2 将棋を気にかけない母に対して不満を抱き、やりきれないでいる。
3 厳格な態度の父と異なり、温かな態度の母に感極まっている。
4 勝敗に関係なく見守ってくれる母に接し、ほっとしている。

(6) ある生徒が、家に着いたあとの「祐也」について次のようにまとめました。［A］、［B］に入る具体的な内容を、それぞれ**二十字以内**で書きなさい。

「祐也」は家に着いたあと、浴槽につかっているあいだも、夕飯のあいだも、研修会で戦ってきた緊張がとけて、ただただ眠たく、ベッドに入ってからは、［A］、涙があふれ、布団をかぶって泣いているうちに眠ってしまった。夜中の1時すぎに目が覚め、ベッドのうえに正座をし、将棋をおぼえてからの日々を思い返し、今日の4局を並べ直したとき、プロにはなれなかったけれど、それでも［B］思いを抱いた。

6

ある中学校で、国語の時間に行った、類義語に関する学習で、場面や状況に応じた適切な言葉づかいについて、意見文を書くことになりました。次の文章は、ある中学生が「美しい」と「きれいだ」の違いについて調べてまとめたものの一部です。これを読んで、あとの(1)～(3)に従って文章を書きなさい。（10点）

私は形容詞の「美しい」と形容動詞の「きれいだ」の違いについて考えました。「ひたむきな姿が美しい」は、しっくりしますが、「ひたむきな姿がきれいだ」は、変な感じがします。「床をきれいに掃く」は、しっくりしますが、「床を美しく掃く」は、やはり変な感じがします。「美しい風景」と「きれいな風景」は、どちらも言えそうですが、場面や状況が異なるように感じられます。

(1) 題名を書かないこと。
(2) 二段落構成とし、第一段落では、「美しい」と「きれいだ」の違いについて**気づいたこと**を書き、第二段落では、**そのことをふまえて、自分の意見**を書くこと。
(3) **百五十字以上、二百字以内**で書くこと。

1 放送による検査（16点）

【資料】

発表項目

テーマ

「折り紙」という言葉の意味

日本で使う「折り紙」

世界で使う「折り紙」

折り紙の特徴を応用した研究

まとめ

質問メモ

田中さんの質問

折り畳める構造をもつ建物のよさとは？

2

次の(1)、(2)に答えなさい。（14点）

(1) 次のア～オの――の漢字の読みがなを書きなさい。また、カ～コの――のカタカナの部分を楷書で漢字に書き改めなさい。

ア　音読で抑揚をつける。

イ　廉価な製品をつくる。

ウ　曇天の中を移動する。

エ　地域の催しに参加する。

オ　事実と意見を併せて発表する。

カ　体の中のゾウキの働きを勉強する。

キ　カンダンの差が激しい。

ク　方位ジシンを購入する。

ケ　物音に驚いて馬がアバれる。

コ　サイワいなことに雨がやんだ。

ありがたい話だと思ったが、祐也はしだいに眠たくなってきた。錦糸町駅(注8)で乗り換えた東京メトロ半蔵門線(注9)のシートにすわるなり、祐也は眠りに落ちた。

午後6時すぎに家に着くと、玄関で母がむかえてくれた。

「祐ちゃん、お帰りなさい。お風呂が沸いているから、そのまま入ったら」

いつもどおり、張り切った声で話す母に、祐也は顔がほころんだ。

浴槽につかっているあいだも、夕飯のあいだも、祐也は何度も眠りかけた。2年と2ヵ月、研修会で戦ってきた緊張がとけて、ただただ眠たかった。

悲しみにおそわれたのは、ベッドに入ってからだ。

「もう、棋士にはなれないんだ」

祐也の目から涙があふれた。布団をかぶって泣いているうちに眠ってしまい、ふと目をさますと夜中の1時すぎだった。父と母も眠っているらしく、家のなかは物音ひとつしなかった。

常夜灯がついた部屋で、ベッドのうえに正座をすると、祐也は将棋をおぼえてからの日々を思い返した。米村君(注10)はどうしているだろう。中学受験をして都内の私立に進んでしまったが、いまでも将棋を指しているだろうか。いつか野崎君(注11)と、どんな気持ちで研修会に通っていたのかを話してみたい。

祐也は、頭のなかで今日の4局を並べ直した。どれもひどい将棋だと思っていたが、1局目と2局目はミスをしたところで正しく指していれば、優勢に持ち込めたことがわかった。

「おれは将棋が好きだ。プロにはなれなかったけど、それでも将棋が好きだ」

うそ偽りのない思いにからだをふるわせながら、祐也はベッドに横になり、深い眠りに落ちていった。

――佐川光晴「駒音高く」より――

（注1）三和土……ここでは研修会場の玄関。
（注2）D1……研修会の階級クラス。
（注3）D2……研修会の階級クラス。
（注4）奨励会試験……日本将棋連盟のプロ棋士養成機関に入会する試験。
（注5）千駄ヶ谷駅……駅名。
（注6）秀也……「祐也」の兄。
（注7）総武線……路線名。
（注8）錦糸町駅……駅名。
（注9）半蔵門線……路線名。
（注10）米村君……小学生の時に「祐也」に将棋を教えてくれた友達。
（注11）野崎君……2局目の対戦相手。

(1) それでも最後まで最善を尽くしてきなさい(あ) とありますが、このときの「父」の心情として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　無理だとあきらめることは勝負に影響を及ぼすので、「祐也」を奮い立たせようと怒鳴りつけている。

2　「祐也」が挽回できそうにないことはわかっているものの、将棋に向き合い全力で臨んでほしいと願っている。

3　連敗することは「祐也」の成長にとって必要であるため、現実の過酷さを受け入れさせようと突き放している。

4　「祐也」が厳しい状況にあることを理解しつつも、対戦相手を打ち負かしてほしいと躍起になっている。

(2) 取り返しのつかないこと(い) とありますが、どのようなことを表しているかを、「祐也」の思いをふまえながら、次のようにまとめました。□に入る最も適切な語句を、本文中から**七字**で**そのまま**抜き出して書きなさい。

「祐也」は、将棋の研修会に入ってから、勝てない苦しみでおかしくなり、その状態が続けば□になるということ。

(3) あふれた涙が頬をつたって、地面にぽとぽと落ちていく(う) とありますが、ある生徒が、この表現の特徴について、次のようにまとめました。□に入る最も適切な語句を、次の1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

□響きをもつ擬音語を用いて、「祐也」の心の内の悲しみを効果的に表現している。

1　鈍く重い　　2　鈍く軽い
3　鋭く重い　　4　鋭く軽い

5

次の文章を読んで、あとの(1)～(6)に答えなさい。（26点）

（中学校1年生の「祐也」はプロ棋士を目ざし、将棋の研修会に通っていた。日々、対局を重ねていたが、最近は何をしても勝てない状況に陥っていた。）

「祐也」

呼ばれて顔をあげると、三和土（注1）に背広を着た父が立っていた。

「どうした？」

心配顔の父に聞かれて、祐也は4連敗しそうだと言った。

「そうか。それじゃあ、もう休もう。ずいぶん、苦しかったろう」

祐也は父に歩みよった。肩に手を置かれて、その手で背中をさすられた。

「挽回できそうにないのか？」

手を離した父が一歩さがって聞いた。

「無理だと思う」

祐也は目を伏せた。

「そうか。それでも最後まで最善を尽くしてきなさい」

「わかった」

父に背をむけて、祐也は大広間に戻った。どう見ても逆転などあり得ない状況で、こんな将棋にしてしまった自分が情けなかった。

10手後、祐也は頭をさげた。次回の、今年最後の研修会で1局目から3連勝しないかぎり、D1（注2）で2度目の降級点がつき、D2（注3）に落ちる。これでは奨励会（注4）試験に合格するはずがない。しかし、そんなことよりも、いまのままでは、将棋自体が嫌いになりそうで、それがなによりこわかった。

祐也はボディーバッグを持ち、大広間を出た。

「負けたのか？」

父に聞かれて、祐也はうなずいた。そのまま二人で1階まで階段をおりて、JR千駄ヶ谷（注5）駅へと続く道を歩いていく。いきには気づかなかったが、街はクリスマスの飾りでいっぱいだった。

「プロを目ざすのは、もうやめにしなさい」

祐也より頭ひとつ大きな父が言った。

「2週間後の研修会を最後にして、少し将棋を休むといい。いまのままだと、きみは取り返しのつかないことになる。わかったね？」

「はい」

そう答えた祐也の目から涙が流れた。足が止まり、あふれた涙が頬をつたって、地面にぽとぽと落ちていく。胸がわななき、祐也はしゃくりあげた。こんなふうに泣くのは、保育園の年少組以来だ。身も世もなく泣きじゃくるうちに、ずっと頭をおおっていたモヤが晴れていくのがわかった。

「将棋をやめろと言っているんじゃない。将棋は、一生をかけて、指していけばいい。しかし、おととしの10月に研修会に入ってから、きみはあきらかにおかしかった。おとうさんも、おかあさんも、気づいてはいたんだが、将棋については素人同然だから、どうやってとめていいか、わからなかった。2年と2ヵ月、よくがんばった。今日まで、ひとりで苦しませて、申しわけなかった」

父が頭をさげた。

「そんなことはない」

祐也は首を横にふった。

「たぶん、きみは、秀也（注6）が国立大学の医学部に現役合格したことで、相当なプレッシャーを感じていたんだろう」

父はそれから、ひとの成長のペースは千差万別なのだから、あわてる必要はないという意味の話をした。

千駄ヶ谷駅で総武線（注7）に乗ってからも、父は、世間の誰もが感心したり、褒めそやしたりする能力だけが人間の可能性ではないのだということをわかりやすく話してくれた。

(2)「すぐには気持ちを切り換えられないだろうが、まだ中学1年生の12月なんだから、いくらでも挽回はきく。高校は、偏差値よりも、将棋部があるかどうかで選ぶといい。そして、自分なりの将棋の楽しみかたを見つけるんだ」

(2) 次のア、イの――のカタカナの部分を漢字で表したとき、その漢字と同じ漢字が使われている熟語を、それぞれあとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を書きなさい。

ア 部屋をカタづける。

1 方言　2 破片　3 模型　4 形式

イ 当初の目的をカンスイする。

1 遂行　2 推進　3 睡眠　4 抜粋

3

次の文章を読んで、あとの(1)～(3)に答えなさい。（12点）

【漢文】

宓子（注1）賤治単（注2）父、弾鳴琴、身不下堂、而単父治。巫馬（注3）期以星出、以星入、日夜不居、以身親之。而単父亦治。巫馬期問其故。宓子曰、「我之謂任A。子之謂任B。任力者故労、任人者故逸。」

【書き下し文】

宓子賤単父を治むるに、鳴琴を弾きて、身堂を下らず、而して単父治まる。巫馬期星を以つて出で、星を以つて入り、日夜居らず、身を以つて之を親らす。而して単父亦治まる。巫馬期其の故を問ふ。宓子曰はく、「我は之れAに任すと謂ふ。子は之れBに任すと謂ふ。力に任す者は故より労す、人に任す者は故より逸す。」と。

（現代語訳）

宓子賤が知事として単父を治めたとき、いつも琴を弾き、自身は堂より下りて来ず、何もしないのに単父は治まった。巫馬期が知事として単父を治めたとき、朝は早く星を見て出かけ、夜も遅く星を見て戻り、日夜政道に尽くして安居せず、自ら政治を行った。そのようにして単父は同じように治まった。巫馬期はその訳を尋ねた。すると宓子賤は答えた。「私の政治のやり方はAに任せて治めるというものです。あなたの政治のやり方はBに任せて治めるというものです。自身の力に頼る者は疲れるが、他人に任せる者は楽なのです。」

――「蒙求」より――

（注1）宓子賤……中国の春秋時代の人。
（注2）単父……中国の春秋時代の地名。
（注3）巫馬期……中国の春秋時代の人。

(1) 以身親之 に、【書き下し文】を参考にして、**返り点**をつけなさい。

(2) 星を以つて出で、星を以つて入り とありますが、どのようなことを表していますか。最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 風流を楽しむこと。　2 物事の兆候があらわれること。
3 仕事に勤め励むこと。　4 事態が差し迫ること。

(3) A、Bに入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次の1～6の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 A 力 B 労　2 A 労 B 力
3 A 人 B 逸　4 A 逸 B 人
5 A 力 B 人　6 A 人 B 力

4

次の文章を読んで、あとの(1)～(5)に答えなさい。（22点）

書く側には、誰も読まないかもしれないなどという想像は浮かんでこない。何の疑いもなく、読み手の存在を当然の前提として文章を綴る。だが、人間には、読む権利があると同時に、読まない自由もある。そんな何の義務も義理もない赤の他人に、ぜひ読んでもらおうと思えば、それ相応の配慮が必要だ。まずは、読むに値するすぐれた内容を盛ること、そして、読むにたえる秀でた表現で綴ることである。わざわざその文章を読んでくれる奇特な相手に感謝し、その負担をできるだけ減らすことで少しでもその労に報いたい。

一般的な心構えとしてなら、そんなことは誰にでもわかっているかもしれない。だが、具体的にどうするかがむずかしい。しかも、表現の方策と効果はつねに一定ではない。読み手により、局面により、その目的により、その他さまざまな条件に応じて、結果はそれぞれ違うから、現実には途方にくれるばかりである。

ただ漫然と書くのではなく、まずは誰が読むのかを考え、語りかける方向を定めよう。こういう極端な例ならわかりやすいだろう。意中の人の心に訴えかけるべき恋文を、もしも万人向けに書き、そんなものをビラのように配ったら、肝腎の相手は本気にしない。だから当然、そんな場合は誰だって、内容も表現も、そのかけがえのない一個人に合わせて書く。

こんなふうに読み手の方向性をしぼる配慮は、特定の人に宛てる手紙にだけ必要なわけではない。程度の違いこそあれ、書きだす前に誰でも考え、実際に試みているはずなのだ。ここが曖昧だと、ピントが甘くなり、フォーカス[注1]が定まらないから、論点がぼやけてしまう。一般向けの文章であっても、どういう人に読んでもらいたいのかという、いわば文章の宛先をできるだけ限定し、ターゲットとなる読者層を明確にして書きたい。意識してピンぼけを防ぎ、シャープな文章に仕立てるためである。

通常の文章はたいてい不特定多数の読み手を想定して書く。だから、もちろん、どんぐり眼[注2]でおちょぼ口[注3]をした丸顔のぽちゃぽちゃっとした女の子などと、個別の読み手をイメージするわけにはいかない。とはいえ、読者層はのっぺりとした得体の知れないかたまりとは違う。子供か大人か、男性か女性か、学生か社会人か教員か職人か主婦か、その問題にどの程度の関心や知識のある人びとなのか、可能な範囲で読者対象をしぼりこみたい。どういう人が読むかによって、適切な表現はそれぞれ違ってくる。どのような人間が読むかという点を一切抜きにして、絶対すぐれた文章などというものはありえないからである。

読み手の立場に寄り添って書くようにと説くのは、おそらく文章作法書[注4]というものの常道だろう。そういう当然のことができるのは、書き始める前に読者層のイメージが頭のなかにおおよそ方向づけられているからだ。むろん、世の中には、物知りもいれば、物知らずもいる。関心のありかも人それぞれみな違う。ぴたりと照準を合わせるのは至難の業だ。それでも、書くのは自分で、読むのは他人、その他人は自分とはまるで違う人間であるという当然きわまる事実を、きちんと認識して書く、その第一歩が肝腎なのである。

子供の生まれた家に市長名で「御出産おめでとうございます」という祝いの手紙が来て、よく見ると宛名が赤ん坊になっていた、そんな笑い話みたいな実話があるらしい。「出産」したのは母親であって、子供は夢中で「誕生」したにすぎない。発信人としては、赤ん坊はまだ字を知らないから実際に読むのは母親だと気をまわしすぎて、全体としてつじつまの合わない通信文になったのかもしれない。もし一度でも、宛名の相手の身になって読み返すことがあったら、こういう間違いはきっと避けられたはずなのだ。

この場合はまだ愛嬌といって済まされそうな例だが、気づかずに相手を傷つけるケースもある。たとえば、東京の人間に「下阪」と書かれたら、きっと大阪の人間はいい気持ちがしないことだろう。大阪へ下るなどと、相手を見くだす態度が気に食わないはずだ。

かつて千年以上も都だった京都、その地に生まれ育った人は、長年にわたって「京に上る」と言われてきただけに、東京に行くという意味の「上京」という語に抵抗が強く、無意識のうちにその使用を避ける傾向がありそうだ。［中略］

以前、「都下小金井市」[注5][注6]と宛てたはがきが舞い込んだことがある。作家の永井龍男から届いた一通だったかもしれない。ほのかに文学的かおりが漂うせいか、「都下」[注9]という懐かしいことばから、国木田独歩[注7]や徳富蘆花[注8]などの時代の武蔵野のおもかげが目に浮かび、一瞬のんびりとした雰囲気を味わったような記憶がある。だが、これをもし、東京の中心街から遠い土地に住んでいることを気にしている人間が読んだら、ちょっと複雑な気持ちかもしれないとも思った。同じそのことばから、都心に住む人が近郊を「いなか」と見くだすまなざしを感じとらないとも限らない。［　　］次第で効果も逆効果もあるから微妙である。

広く読まれる文章では相手も不特定だから、どういう表現で誰が傷つくか、ますます油断がならない。要は他者への配慮であり、やさしさである。基本はそれに尽きるだろう。

――中村明「日本語の作法」より。一部省略がある。――

（注1）フォーカス……焦点。
（注2）どんぐり眼……丸くて愛らしい目。
（注3）おちょぼ口……小さくかわいらしい口。
（注4）文章作法書……ここでは文章を書く方法を著した書物。
（注5）都下……東京都のうちで、二十三区を除いた市町村。
（注6）小金井市……東京都中部の地名。
（注7）国木田独歩……作家。
（注8）徳富蘆花……作家。
（注9）武蔵野……ここでは埼玉県川越から東京都府中までの間に広がる地域。

(1) 読ま と動詞の活用形が同じものを、次の1～4の――の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 勉強をする時間だ。　2 借りた本を返す。
3 係を決めればよい。　4 彼にも話そう。

(2) 全体としてつじつまの合わない とありますが、その理由を次のようにまとめました。［　　］に入る最も適切な語句を、本文中から**十字**で**そのまま**抜き出して書きなさい。

「御出産おめでとうございます」という祝いの手紙が来て、［　　］いたのに、文章が母親に合わせて書かれていたから。

(3) ［　　］に入る語として最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 土地　2 目的　3 相手　4 意味

(4) この文章について述べたものとして最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 文章作法書の手順に従って全体を構成し、文章の書き方が的確に伝わるように表現している。
2 最初に疑問を述べ、次に疑問の答えを裏付ける具体例を示し、説得力を増すように表現している。
3 複数の具体例とともに、意見を繰り返して示し、筆者の主張が明確に伝わるように表現している。
4 問違いを積極的に修正する必要性を具体例に必ず含め、主張に客観性をもたせて表現している。

(5) 他者への配慮であり、やさしさである とありますが、ある生徒が、この語句について、次のようにまとめました。［　　］に入る具体的な内容を、**四十字以内**で書きなさい。

自分が書いた文章を読んでくれる相手に対する感謝として、［　　］、論点をくっきりさせることが大切である。